チュチェ思想の原理解説 1

チュチェ思想は世界をどのように見るのか



チュチェ思想の原理解説 1

チュチェ思想は世界をどのように見るのか

朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社
2026

はじめに

人類の歴史は思想の歴史である。

人類は早くからさまざまな思想を誕生させ、その通りに運命のページを歴史に記してきた。

それは受難の多い運命の歴史であった。幾千年の間、それぞれの思想が教えたのは、奴隷の鎖と封建の絆、資本の鉄鎖に縛られた宿命であった。マルクス主義の出現は一つの転機となった。しかし、それは資本の鉄鎖をぶち壊して宿命の門を閉めただけで、真の運命開拓の門を開いてはくれなかった。

人類は真の運命開拓の道を指し示す思想、運命の灯台を求めてさまよった。

20世紀の始め、あれほど長い歳月にわたって渇望していた救いの陽光が人類に照らしてきた。屈従と受難で汚れた人間の運命史に終止符を打ち、自主的な運命の道を教えるチュチェ思想が出現したのである。

それは新しい歴史の誕生であった。

百万年という人類史上初めて、人間が無上の尊厳と誇りを持って生きる感激的な歴史の始まりであり、無残に踏みにじられ、抑圧されていた人民が歴史の主人となる、自主と創造の新時代の出発であった。

チュチェ思想は人間尊重の思想であり、徹底した自主の哲学である。

チュチェ思想は人間が自主性と創造性、意識性を持つ社会的存在であることを科学的に解明し、運命の主人は人間自身であり、運命を開拓する力も人間自身にあるという、絶対の真理を闡明した。

チュチェ思想の中心には人民がある。

チュチェ思想は人類思想史上初めて人民を最も貴く力強い存在、歴史の主体に押し上げ、その人民による自主的で、創造的で、意識的な社会的・歴史的運動の真面貌を明らかにした。

自主的立場を堅持して創造的方法を具現し、思想意識の役割を

高めて全てを解決していくのは、チュチェ思想が明らかにした新しい社会建設の指導原則である。

　この原則がもたらすのは社会的人間の本性にかなった自然と社会、人間の改造、発展であり、国と民族の自主的な発展と繁栄である。

　社会制度や生活方式の異なるそれぞれの国や民族に未来への真っ直ぐな方向を示す正しい羅針盤はチュチェ思想しかないということを歴史が体験し、現実が示している。

　偉大な金日成（キムイルソン）主席は、朝鮮人民ばかりでなく、全人類のためにチュチェ思想を打ち出した。

　偉大な金正日（キムジョンイル）国防委員長は、主席が人民という土壌に種をまき育ててきたチュチェ思想を生い茂る森に変えさせた。

　偉大な思想は偉大な実践を生む。

　チュチェ思想が創始されてから一世紀も経っていない短い歴史的期間に、人類が数千年の間願い続けながらも成すことができなかった奇跡が創造された。長い歳月、人々を抑え続けてきた暗黒と絶望、支配と従属が一掃され、光明と希望、自主と独立の新しい歴史が開かれた。

　長い間抑圧されてきた人民を立ち上げ、その威力で前進する新しい歴史、新しい時代を切り開き、導いてきたここに、チュチェ思想の偉大さがある。

　今日、チュチェ思想は敬愛する金正恩（キムジョンウン）総書記によってさらに深化、発展している。金正恩総書記がいるがゆえに、チュチェ思想は変わることなく人類を自主の道へと導いている。

　真理は人民の心に刻まれる。

　地球上には数十億を超える人類が生活している。

　国や民族によって思想や信仰、社会制度と文化は異なっても、真の運命を願い、偉大な思想に従おうという人民の志向は一様である。

　本書では、世界観とチュチェ思想の哲学的原理について解説する。

　本書が、世界の多くのチュチェ思想信奉者と進歩的人民にチュチェ思想の深奥な真理を教え、明るい未来に対する信念と希望を抱かせればと願うものである。

目　　次

1. 運命と世界観

まず、チュチェ思想が明らかにした人間中心の世界観について考察することにする。

チュチェ思想は人間中心の哲学的原理と社会歴史原理、指導的原則から成り立っている。

ここで人間中心の哲学的原理は、中核的で基礎的な位置を占めていると言える。

全ての物事には順序があるように、チュチェ思想の深奥な真理を認識する上でもまず、人間中心の哲学的原理から把握しなければならない。

もしかすれば一部の人は、世界観など知らなくても生きていけると、生活に直接的に必要な知識も多いのに長ったらしく世界観を論ずる必要まであるのかと、早々と本を閉じるかも知れないが、ちょっと待って、こんなことを考えてみよう。

世界観は誰もが持っている。

人間が自分の生について考えるということは、もはや一定の世界観を持っていることを意味する。人間が生活し、自分の肉体的生命を維持していくためには食べて着る物など物質的富が必要となるように、真の人生を生きるためには、正しい世界観を持たなければならないのである。

話が進めば分かるようになるであろうが、人間中心の哲学的原理は運命の支配者、開拓者が誰であるかを明らかにする原理、人間の本質的特性に対する見解、人間を中心に解明した世界に対する見解と観点、立場などを教えている。

それでは世界観とは何であり、真の人生を明らかにする人間中心の世界観とは果たしてどういうものであるかについて具体的に見ることにしよう。

1) 人生の灯台

灯台は人類が海に進出し始めてから航海において欠かせない要素、いや航路を教える最も重要な要素として登場した。

世界観はちょうど、この灯台に喩えられるであろう。

昼には塔の模様と色で、夜には灯台の光で、霧の時には無線電波信号や音声信号で自分の位置を知らせる灯台のように、正しい世界観は真の生の進路を教える、人生の灯台なのである。

それでは世界観とは何か。

金正日国防委員長は次のように述べている。

「人間が世界をどのような観点から観照して評価し、どのような立場で対応するのかがまさに世界観です」

人間は誰もが一定の世界観を持っている。

世界観は全体としての世界に対する見解、観点と立場であるが、これには宗教的な世界観と哲学的世界観がある。

宗教的世界観が信仰に基づく世界観であるなら、哲学的世界観は論理的に体系化された世界観である。

世界観について具体的なイメージを持ってみよう。

人間は誰を問わず、世界、すなわち自然と社会と関係を結んで生きている。従って人間は周囲で行われることについて無関心ではいられない。必ず自然と社会で起こっているさまざまな現象について、何かを考えるようになる。

人々が世界の個別的な事象を見て対応する、一つ一つの見解と態度を見れば、それには共通した点がある。

太陽を見て神秘に考えた原始人たちは、稲妻や雷も神秘に考え、それによる災難を逃れるようにしてくれと神秘な存在に祈った。

これらをよく見れば、一つの共通点、全ての事象を神秘的に対する、より一般的な見解と態度があるということが分かるであろう。すなわち人々は事象の総体である世界をまとめてみる、より一般的な

見解と態度を持っており、個別の事象を見るさまざまな見解と態度はそれと結び付いている。

なぜなのか。

自然と社会の個々の事象はそれぞれ孤立しているのではなく、互いに関連しながら一つの統一体を成しているからである。

個別の事象が存在するだけでなく、それらの全一的体系として全体的な世界が現実的に存在する。

たとえば松の木は個別の一つの事物であるが、それは孤立しているのではなく、他の樹木や自然の他の要素と連関して存在する。同じように、全ての自然的、社会的要素が一つに統一されて、私たちが暮らす世界を成すのである。

ところが人間の認識は現実世界の反映であるため、人間は個別の事象に対する具体的な見解と態度だけでなく、必ず世界を全体的に見て対応する、最も一般的な見解と態度を持つようになる。

それがほかならぬ世界観なのである。

具体的に見れば、全体としての世界がどのようになっており、どのように変化、発展するのか、人間はいかなる存在であり、世界でどういう地位と役割を占めているのか、世界を対象として活動する上でどういう観点と立場を持つべきかという問題に対する解答を、総じて世界観という。

では世界観は生の進路、運命開拓の前途をどのように示すのか。

所詮、人間の生活と運命開拓における前進は、自然と社会に対する正しい認識を抜きにしては考えられない。

西洋哲学の発祥地と知られている古代ギリシアでこういうことがあったという。

「万物の根源は水である」という命題を打ち出した哲学者タレス（B.C.7世紀～B.C.6世紀）が熱心に学問を探求すると、周りの人々の中には彼をからかったり、やきもちを焼く者がいた。

ある商人は彼が貧しく暮らしているのを見て「多くの人があなたを知識の多い大哲学者だと言っているが、それでその知識があなたに

何をくれたのですか。お金ですか、それともパンですか」とからかった。するとタレスは「あなたは私が貧しいからといって知識をからかうようであるが、では後にどうなるか見ましょう」と応対した。

彼は豊かな天文学と数学、農業の知識を利用して次の年にオリーブの作柄が大豊作になるであろうと判断し、廉価で城内のオリーブ搾油機をみんな買い上げた。収穫の季節になるや、彼が予見した通りに例年になかったオリーブの大豊作になった。急いで人々は搾油機を求めて我先に彼のうちへ駆け込んできた。タレスは高い値段で搾油機を売りお金をたくさん儲けて、人々に知識の力がいかに大きいかを実証したという。

私たちが社会的活動を通じて自然から自分の生活上の要求を満たしうるものを得るためには、自然について、社会について知っていなければならない。

この世の全ての事象はそれぞれ固有の特性を持っており、自分の法則に従って変化発展する。それを知らずには米一粒、糸一本、石炭一グラムもまともに得ることができず、正しく利用することもできない。

とりわけ世界観が重要である。一見すれば世界観はその一般性のため、日常的で具体的な人間の活動とは距離があるように思われるが、決してそうではない。

世界観は現実に対する人々の立場と態度を規定し、彼らの思考と行動を制約する。

仮にある人が「満腹に食べ、裕福に暮らせればそれでいいや。何をまた望もうか」と言ったとしよう。これは生の目的に対する具体的な見解の表現であるが、この見解の根底には人間を単に生物学的存在とだけ見なす、世界観的見解がおかれているのである。

中国の作家魯迅の作品「阿Q正伝」で出てくる阿Qは、常に精神的に「敵」を「屈服」させる。人に殴られてからも「せがれに殴られたのと同じだ。最近の世の中は本当に言いようがない」と言いながら勝利でもしたかのように意気軒昂とし、儲けたお金を賭博で奪われた上に殴打までされても自分のほっぺたを力一杯殴り打っては復讐したと

満足して眠るのである。阿Qのいわゆる「精神勝利法」とは結局、幸せや不幸は皆考え次第であるという主観主義的思考であり、行動であるが、これは世界を人々の意識の産物と見なす主観観念論的世界観に基づいていると言える。

このように世界観はどこで何をしようが、人々の思考と行動を制約する。いわば、人々は自分が持っている世界観に基づいて何でも見て判断し、実践活動を行うのである。

ではなぜ、世界観が人々の思考と行動の基礎にありながらそれを制約するのか。

世界に存在する全ての事象は、自らの固有の特性と側面を持ちながらも、その特性と側面を貫いている最も一般的で本質的な関連の中に存在し、この関連によってそれぞれの事象や側面の発展法則と方向が制約されるのである。すなわち個別の事象の運動変化は全体としての世界を貫く、最も一般的な法則に基づいてなされるのである。

ところが上述したように、人間の認識はこうした現実世界の反映であるため、人間が世界を認識し改造する上で提起される全ての個別的、具体的問題を解決していく基礎には、常に世界全体に対する最も一般的な見解、観点と立場をどのように確立するかがおかれるようになる。言い換えれば、人々は自分の持っている世界観に基づいて全ての思考と行動の目的と方向、その基本内容を定め、活動するのである。

特に世界観は人間の要求と利害関係を反映した思想意識であるがゆえに、どういう世界観を持っているかによって、その人の思考と実践活動の目的、方向が異なってくる。

進歩的な世界観を持った人間は、人民大衆のために、社会の発展のために思考して活動し、反動的世界観を持った人間は、搾取階級の利益のために人民大衆の利益を侵害し、社会の発展を妨げる方向で思考し活動する。

言い換えれば人間は誰もがその科学性と水準とは無関係にあれこれの世界観を持ち、必ずそれに基づいて全ての思考と行動を行っていくのである。

全ての進歩的な思想と科学知識は、人間の運命問題の解決に役立つが、個別科学は運命問題に対する包括的で全一的な解明を与えることができず、従ってそれが運命開拓の方途を明らかにすると言えないのである。

哲学以外の他の全ての科学は、自然と社会のある一部分や側面、過程を研究対象とし、そこで作用する必然的な連関と合法則性を解明することにより人々の運命開拓に寄与する。

個別の科学とは異なって、哲学は全体としての世界を研究対象とし、世界の本質とその変化発展の合法則性を解明する。

また、哲学の使命は単に世界を解釈することにあるのではなく、世界を改造し、変革することにあり、人々をして正しい世界観を持って自己の運命を成功裏に開拓していくようにすることにある。

結論的に言って人間が世界を改造し変革して自己の運命を成功裏に切り開いていくためには、世界を改造し変革する武器である、正しい哲学的世界観を持たなければならない。

では、どのような世界観を持ってこそ生の目的と方向を正しく定め、真の生のために力強く前進することができるかを続けて見ることにしよう。

2) 真の生のための世界観

ローマのバチカン宮殿に行けば、15〜16世紀のイタリアの画家ラファエロが制作した有名な壁画「アテネの学堂」を見ることができる。

哲学（哲学とはほかならぬ世界観を与える学問である）をテーマにしたこの絵には、B.C.4世紀アテネの哲学者をはじめそれぞれの歴史的時代に生きた、50余名の学者たちが描かれている。絵の中心には右手を上げて天を指しているプラトンと大地を指しているアリストテレスが形象化されている。

16世紀の初めに創作されたこの絵は、私たちに歴史的にどういう世界観があったかを物語っている。絵の中で右手を上げて天を指して

いるプラトンの形象は観念論的世界観を象徴しており、大地を指しているアリストテレスの形象は、唯物論的世界観を象徴している。

金正日国防委員長は次のように述べている。

「過去における世界観の発展史は、相反する二つの哲学的潮流、唯物論と観念論、弁証法と形而上学の闘争の歴史でした」

古代から現代に至るまでの人類の思想史上には、さまざまな世界観が出現（こういう事実そのものも世界観がいかに人間に重要なものであるかを物語っている）したが、それらを大きくは観念論的世界観と唯物論的世界観に分けてみることができる。

観念論的世界観は世界を「絶対理念」「神」のような人間以外の精神的存在や人々の主観的意識の産物であると見なす世界観である。

たとえば、プラトンはどこかに永遠に変わらない「イデアの世界」があり、現実の世界はその影に過ぎないと言った。

こうした世界観の荒唐無稽さが科学の発達した今日には明白に証明され、それをもってしては人間が周囲世界を正しく認識できず、自己の運命をまともに切り開いていけないということが論議の余地もなく明らかになった。

唯物論的世界観はどうなのか。

唯物論は世界が物質から成り立っており、意識は物質が人間の頭に反映されたものであると見る。

もちろん唯物論だからといって、皆同じであるわけではない。

歴史的に見れば、唯物論は大きくは古代の素朴な唯物論から近代の形而上学（形而上学とは世界のあらゆるものが固定不変であると見る哲学流派）的唯物論を経てマルクス主義弁証法（弁証法とは世界のあらゆるものが絶えず運動変化すると見る哲学流派）的唯物論へと発展してきた。

古代から近世に至るまでの唯物論は直観的で経験的なものとして、人々の運命開拓において一定に進歩的役割を果たしてきたが、思想領域、進んでは社会生活の全般において観念論的世界観を駆逐することはできなかった。

特に中世には宗教が全てを支配した。宗教は人々の精神を捉え、運命を宿命的に説教しながら人々の人生を翻弄した。宗教の教理に反するいかなる主張も無慈悲な弾圧の対象となった。

イタリアの学者であるジョルダーノ・ブルーノはコペルニクスの「地動説」の積極的な支持者だという理由からして1592年にカトリック教会に逮捕されて8年近くも過酷な拷問を受けた挙句、宗教裁判によって火刑にされた。

そのときから200年が経った後、人々は記念碑を立ててそれに次のような碑文を刻み込んだ。

「……火刑にされたその場で彼が見通したその世紀より」

ジョルダーノ・ブルーノが正義と真理に対する信念を抱いて生の最期まで固く信じていた歴史の瞬間はとうとうやってきた。

19世紀の初め、マルクス主義が出現したのである。

マルクス主義の創始、これは単に新しい思潮の出現だけを意味したのではない。思想領域で人類に宿命を強要していた観念論と神秘主義の完全な敗北を意味した。

マルクス主義の創始者たちは観念論の外皮をかぶっている弁証法（マルクスの表現によれば、「転倒された弁証法」）の成果と当代の科学発展水準に基づいて弁証法的唯物論を打ち出した。

その内容は一言で言って、世界は物質から成り立っており、世界の全ての事象が相互連関していて絶えず運動、変化、発展するということである。

マルクス主義世界観は、世界を客観的な現実のままに反映した科学的な世界観として、歴史の発展と人々の運命開拓に大きな影響を与えた。マルクス主義によって被搾取勤労大衆は、宗教的な幻想と観念論的虚構から脱して、自らの不幸は星の回りや神の啓示によってではなく、資本家階級の搾取とそれを擁護する資本主義制度そのものに原因があるということ、搾取と抑圧から脱して幸せに生きる道は資本主義に反対して闘うことであることを悟るようになったのである。

しかしそれは、世界をあるがままに見て対応する、言い換えれば

客観的物質世界の変化発展の合法則性に対する正しい認識に基づき、それに即して行動することを教える世界観である。
それだけでは人間が自分の生の目的を実現することも、幸せを求めることもできない。
真の人生を切り開くためには客観的な合法則性を認識し、それに即して行動するだけでなく、それを踏まえて主動的に、積極的に自然と社会を改造し変革しなければならない。
唯物弁証法的世界観は、人々をして自分の人生のために責任と役割を全うするようにまではさせない。それにそれは人間の運命開拓の前途を直接的に示しているのでもない。
人間の運命開拓の前途を直接的に、科学的に解明しているのは、ほかならぬ人間中心の世界観なのである。
人間中心の世界観は、全ての世界観的問題を人間と関連させて提起して解決し、世界を主動的に、積極的に利用しながら生き、発展していく人間を中心に据えて世界を見て対応することを求める。
人間中心の世界観は人々に運命開拓の真理を直接的に教えている。それは人間を中心に世界に対応する、見解、観点、立場を与えている。それによって人々に生の主人となった自覚を与え、運命開拓の真っ直ぐな道を指し示す。
人々をして世界に対する科学的な認識に基づいて主動的で積極的な努力で人生を、幸せを創造していくようにする見解、態度を与えるのが、人間中心の世界観なのである。
これは客観世界を無視して人間の主観的欲望や念願を一方的に押し立て、世界を自分に有利に恣意的に解釈する主観主義でもなく、また世界を単にあるがままに反映する客観主義でもない。
また世界が人間を中心に成り立っているとか、人間が万物の尺度であるとかいう、非科学的な主張でもない。
今からそれについていちいち具体的に見ることにしよう。

2. 運命開拓の根本的原理

人間中心の世界観が人々に教える人生の道理の中で最も重要なことは、運命の主人は誰であり、それを開拓する力がどこにあるのかという問題に対する解答である。
金日成主席は次のように述べている。
「チュチェ思想は、自己の運命の主人は自分自身であり、自己の運命を切り開く力も自分自身にあるという思想です」
運命の主人は人間自身であり、運命を切り開く力も人間自身にある。
これは人間中心の世界観が明らかにする運命開拓の根本的原理である。人々が生活していく上ではあれこれと解決すべき問題が多いが、その全ての問題に対する解答がこの一つの命題に集約されている。
人間の運命を一つの大きな船にたとえていえば、運命という大きな船の舵取りも人間であり、その船の漕ぎ手も人間なのである。
それでは運命の主人が人間自身であり、それを開拓する力も人間自身にあるということが何を意味しているかについて見ることにしよう。

1）運命の主人は人間自身

古代ギリシアの神話の中に「運命の女神」に対する話がある。
オリュンポス山頂の高い雲の上に建てられた豪華な黄金の宮殿には、諸神たちと共に謹厳な運命の女神たちが暮らしていた。
人間の運命はもちろんのこと、世界万物の支配者であるゼウスの運命までも彼女らの手に握られていた。
クロトという女神は、人間の生命の糸を紡ぎ出していたが、その糸が切れると人間の生涯も終わるという。かといえばラケシスという

女神は、人間の一生を決定するくじを引き、アトロポスという女神は、姉たちが人間の一生として定めたことを長い巻紙に記録するが、これに一度記録されれば、その運命から逃れられなくなる。……

神話とは古代の人々が作り出した話であるが、「運命の女神」たちに対する話には、人間の運命の主宰者に対する見解が込められている。

人間の運命は世界との関わりの中で切り開かれる。言い換えれば世界を成す自然環境や社会的条件との相互作用の中で人間の運命が切り開かれる。ここから人間の運命を支配する主人が人間自身なのか、でなければ人間以外の何らかの神秘な存在や周囲環境なのかという問題が提起されるのである。

神的存在を人間の運命の支配者と見なす見解は古代ギリシアの神話だけでなく、いろいろな宗教的世界観からも見出すことができる。

古代ギリシアの神話や宗教で主張するように、人間の運命を支配するのが果たして神的存在であろうか。

そういう見解を信ずる人々には遺憾なことであるが、明白にそうではない。

科学技術が発達し、文明が驚異的な水準に達している今日に至って、あの空のどこかに神が存在すると見るのは間違った見解である。

運命の主人は、その「女神」たちではなく人間自身である。

人間は自己の運命に対して自分が責任を持っており、自分の意思通りに切り開いていく権利を持っている。自分の人生の要求を実現するために、自分の利害関係によってさまざまな運命の道を選択してその過程を設計し、決心を固めながら自己発展の果てしない行路を歩んでいる存在がほかならぬ人間なのである。

では人間が自己の運命の主人となるのはなぜなのか。

それは人間が自然と社会を支配するからである。人間が生きるというのは、周囲の事物とのさまざまな関係の中で自分の要求を実現していくということであるが、周囲世界を支配するのが人間であるなら、人間の運命の主人は人間自身であるという結論が出てくる。

これについて具体的に見よう。

人間は世界の主人、自然と社会の支配者である。

世界には多様な物質的存在がある。しかし周囲世界を支配しながら生きる存在はただ人間だけである。たとえば、動物は外部環境に従属されて自分の生存を維持する。動物は自然環境に順応してこそ個体を保存し次代を残して種を保存することができる。草原の「王」と言われる獅子も力が強くて他の動物を捕食しながら生きるが、自然を支配することはできない。それで餌がなければ他に方途を探せずに死んでしまう。日照りによって川や湖の水が全部乾いてしまうと、動物が群を成して死ぬ現象をたびたび目の当たりにするが、これは動物が周囲世界を支配しながらではなく、周囲世界に順応する方式で生きているということを物語っている。

これとは異なって人間は周囲世界を自分の意思に即して服従させながら生きていく。

人間は何よりも自然を支配する。

自然を自分の利益と要求にふさわしく利用するだけでなく、自然が人間に及ぼす不利な影響を克服し、それを有利な条件と環境に変えながら生きていく。人間は堤防を積み、川を治めて洪水や旱魃を防ぎ、電気を生産し、地下資源を採掘して利用し、野生動物を馴致して使ったりもする。また自然の荒廃化を防いで山や野にあらゆる有用な動植物が繁盛するよう自然環境を改造したりする。

人間はまた社会の主人である。

もちろん人間は社会的環境の影響を受けるが、人間と社会との関係から見るとき、主動的で決定的なのは人間による社会の支配である。

全ての社会的富は人間が作り出して利用するものであり、人間は自分の要求に合わない社会制度を替えたり改造していく。奴隷社会が封建社会に、封建社会が資本主義社会に交替され、ついには搾取と抑圧を終局的に一掃した社会主義が出現した歴史的事実は、それを見せている。

こういう視点からすれば結局、神的な存在もほかならぬ人間が支配する。

神話そのものが人間が作り出したものである。ご周知のように、古代ギリシアの神話に登場する全ての「神」は、皆人間の格好をしており、人間のように恋もし、やきもちを焼いて闘ったり、または互いに助け合ったり子どもを生んで育てたりする。さまざまな宗教理論にもその主張を作り出した人間、すなわち創始者がいるという事実は、運命の支配者として神の存在などは人間が作り出した虚構に過ぎないということを再度証明している。それゆえ諸神による人間の「運命主宰」や諸神同士の「愛」と「喜び」などは皆人間が支配すると言える。

このように人間が周囲世界、自然と社会を支配するだけに、人間に支配される周囲世界の何かが人間の運命の主人にはなれないのである。世界を支配する主人である人間が自己の運命の主人になるのは当然のことである。

人間が自己の運命の主人であることを認識する上で私たちが明白にしておくいくつかの問題がある。

まず、人間が世界を支配するということを形而上学的に理解してはならない。

人間は現在、世界の全ての事象を皆支配しているのではない。だけでなく人間が支配している領域は周囲世界、とりわけ広大無辺な自然の領域に比べれば極めて狭小であるとも言える。

人間が世界を支配するということは、人間が世界に従属されているのではなく、それを支配する位置にあり、無限の世界に対する影響力を絶えず拡大していく条理を言うのである。

次に、社会も人間が作ったという言葉の意味を、人々がいつでもさまざまな社会制度を気ままに選択しうるという意味に理解してはならない。社会には現に人間の意志とは関係なく作用する、客観的合法則性がある。人間は社会発展の客観的法則を正しく認識し、正しく利用するときにのみ社会を自分の要求に即して支配することができる。社会も人間が作ったということは、人間が社会関係の直接の担当者であるという意味である。

また、人間が自己の運命の主人であるというチュチェ思想の原理を

個人主義的立場で理解してはならない。

ある人は、自己の運命の主人が自分自身であるというチュチェ思想の原理を、個人の一身上の問題解決に帰着させて間違って解釈している。すなわち、自分個人の立身出世と名誉、栄耀栄華はひとえに自分の努力次第であるというなど……

個人の利己的な目的を実現しようというこうした見解は、チュチェ思想の原理とは何のゆかりもない。

チュチェ思想で運命の主人として押し立てている人間は、哲学的範疇である。

言い換えれば、社会的、集団的存在として自然と社会との関係で哲学的に一般化された概念であり、ひいては自然を改造し社会を変革する担当者である勤労人民大衆を指す言葉である。

チュチェ思想で人間の運命を論ずるとき、それは自然と社会を自分の意思と要求にふさわしく支配するために闘う人間、勤労人民大衆の運命であり、その運命の前途が勤労大衆自身にかかっているということである。

あえて個別的存在としての人間を論ずるなら、その個人は勤労大衆という社会的集団の一構成員であるときにのみ意義を持つのである。

結論的に言って運命の主人は人間自身である。

2）運命を切り開く力も人間自身に

金日成主席は回顧録『世紀とともに』において次のように述べている。

「少年会のメンバーのなかには、キリスト教信者の子弟が少なくなかった。彼らは両親から宗教的影響を強く受けていたため『神様』が本当にいると信じていた。彼らには、『神様』はいないし、宗教を信じるのは愚かなことだ、といくら言い聞かせても効果がなかった。

ある日、私はわれわれの影響下にあった朝鮮人小学校の女教師に

頼んで、信者の子どもたちと一緒にミサに参加してもらうことにした。

女教師は、私に頼まれた通り子どもたちを連れて礼拝堂へ行き、ひねもす『全知全能の父なる主よ、ひもじい私たちに餅を与え、パンを恵みたまえ』と祈らせた。しかし、彼らに餅やパンが恵まれるはずはなく、依然として空腹にさいなまれるだけだった。今度は、女教師が取り入れの済んだ小麦畑に子どもたちを連れて行って、落ち穂拾いをするようにさせた。女教師は子どもたちと一緒に畑から大変な量の落ち穂を拾い集めてきた。そしてそれを脱穀し、パンを作って子どもたちに分け与えた。子どもたちはパンを食べながら『神様』を拝むより実際の労働によって食べ物を得る方がましだと考えるようになった」

運命を開拓する力は人間自身にある。これは金日成主席が朝鮮人民の運命を救うための闘争に身を投じた当初に探し出した真理である。

金日成主席が吉林毓文中学校に籍を置き、闘争を開始した当時、朝鮮の反日民族解放運動の実態は凄惨であった。

民族解放運動を標榜していた多くの人々が外部勢力に依存して独立を達成してみようと妄想していた。各々が党派を作りコミンテルンに承認を受けようと走り回ったり、米国のような帝国主義列強に独立を請願して駆け回ったりした。

しかしその結果は悲惨であった。

代表的な事例が「ハーグ密使事件」である。

「ハーグ密使事件」とは当時朝鮮の皇帝であった高宗が1907年6月にオランダのハーグで行われた第2回万国平和会議に「乙巳5条約」の不法性を暴こうと朝鮮代表団を派遣した事件を言う。

日本帝国主義侵略者によって1905年11月17日、「乙巳5条約」が捏造されたことにより朝鮮は外交権を完全に奪われ、朝鮮の内政は事実上日本「統監府」によって左右されるようになった。

日本帝国主義侵略者によって国と民族の運命が生死岐路に立たされたとき、李儁、李相卨、李瑋鐘など、愛国文化啓蒙運動を行って

きた憂国の士は一縷の希望をかけて、悔しい国の境遇を国際社会にアピールしようと企画した。彼らは第2回万国平和会議をよい機会に考え、皇帝を利用してこれを成功させようと活動した。

一方、高宗は自らの支配権を保存するために万国平和会議に幻想を抱き、李儁らをこの会議に秘密に参加させ、「乙巳5条約」が日本帝国主義によって捏造されたことを暴くことにより、外部勢力からの同情を得、日本帝国主義に奪われた国権を回復しようとした。

李儁ら3名の憂国の士は、国王の密書を携え、オランダのハーグに到着し、万国平和会議に朝鮮代表として参加することを提起した。

しかし会議に集まった列強は、日本帝国主義を積極的に庇護しながら「乙巳5条約」によって朝鮮の外交は日本が代わり役をすることになっている以上、朝鮮の代表は認めることができないという口実で議長をそそのかして朝鮮代表の会議参加を拒絶した。

朝鮮の代表たちはこういう状況下でもあらゆる可能性を利用して日本帝国主義の強盗的な朝鮮侵略策動を暴露し糾弾する活動を積極的に繰り広げた。彼らはハーグにある国際記者協会の演壇とそこで発刊していた各種の出版物を通じて、朝鮮侵略で日本帝国主義が犯した犯罪行為をことごとく告発し、それを阻止、破綻させるための朝鮮人民の闘争を支持してくれるよう世論に熱烈にアピールした。

しかし日本帝国主義の悪辣な妨害工作と各国代表たちの冷たい反応により列強の同情を求める密使たちの涙ぐましい努力はそのつど、挫折の苦杯を飲んだ。

李儁は遅くなりとも列強も日本帝国主義とぐるになっていることを悟り、悲憤慷慨してその場で割腹自殺することによって帝国主義の侵略策動に抵抗した。

ハーグ密使事件は日本帝国主義の朝鮮侵略にブレーキをかけることはできなかった。

日本帝国主義は、この事件によって尻込みし、たじろいだりしたのではなく、むしろこれを奇貨として朝鮮侵略をより強化する方向へと進んだ。

日本帝国主義は密使派遣の責任を口実に高宗を皇帝の地位から退位させ、「丁未7条約」を強要して朝鮮の内政権を完全に奪い取った。それにより朝鮮の亡国は時間の問題となった。

万国平和会議場を赤く染めた李儁の血は、世界のどの強大国も朝鮮に独立をプレゼントしないということと、人のお陰では自己の運命を救い、切り開いていけないということを警告した。

金日成主席は当時、民族解放運動の実態と歴史の教訓を見抜き、自己の運命を救う力はほかならぬ自分自身にあるという貴重な真理を発見した。

人間の運命を救う力は人間自身にある！

振り返れば、人類史の黎明期から人間は自己の運命を切り開いてくれる、救援の手をもどかしく求めてきた。

古代エジプト人たちは太陽の神殿を建て、代々に太陽神に莫大な供物をさし上げ、マヤ族は1回に2万名の奴隷の心臓をえぐって供えながら太陽神に幸運を祈ったという。

インカ族が太陽と少しでも近くで暮らし、太陽の恩恵をもっと多くこうむるために、広大な沃土も捨ててアンデス山頂に上り「太陽の都市」を建設したという説もある。

かと思えば被搾取勤労大衆は、神や帝王、英雄たちに自らを悲惨な境遇から救ってくれるよう期待をかけたりした。

しかし、この宿願は長い歳月が経ってもなかなか実現することができなかった。

それもそのはず、人間の運命を救う力はほかならぬ人間自身にあったからである。

これについてもっと具体的に見ることにしよう。

人間は自然と社会を改造する上で決定的な役割を果たす。

人間による自然と社会の改造、変革には、物質的・技術的手段をはじめ、いろんな要因が作用する。

またそれらの役割も重要である。たとえば、社会改造で客観的条件、いわば国際的環境や国内の政治情勢などは極めて重要である。

たとえば、情報産業の時代である今日、社会経済発展において科学技術の果たす役割は驚くほど大きくなっている。

こういう現象を見て今、科学技術が人間の運命開拓、具体的には社会の変化と発展において原動力であると主張する見解もある。

いわゆる「知識経済社会」論議がそれである。

「知識経済社会論」者たちは、「知識経済社会」を情報設備が物質的富の生産と社会生活の基礎となる社会だと定義する。

彼らの主張の根底には技術決定論が置かれている。

技術決定論によれば、技術が社会的変化を生む原動力となっている。

技術はこれを所有したり利用しうる人間とそうでない人間の間に、権力関係の変化をもたらす。

こうした技術決定論の立場から彼らは、情報技術が急速に発展し、それが社会生活に及ぼす影響力が大きくなっている側面を誇張しながら、「産業社会」、資本主義社会が「科学技術革命、情報革命」によって「情報社会」に変化していると言っている。

果たして科学技術が歴史を切り開く「最も強力で重要な、そして波及効果の大きい原動力」になるのか？

彼らが主張するように、人間の運命を切り開く決定的要因が科学技術なのか？

科学技術を社会発展、運命開拓の原動力と見なす人々は大きな錯誤をした。彼らは一つの事実を忘れている。忘れているのか、そうでなければわざと背を向けているのか。

情報技術をはじめとするいろいろな物質的・技術的手段はあくまでも人間が作り出したものであり、人間のコントロールによってのみ自分の役割を果たすことができる。

もちろん、科学技術は人間の運命を切り開く上で重要な役割を果たす。しかし、いくら発展した最先端技術手段であるといってもそれを作り出して利用する人間の役割に代わることはできない。

同様に、社会関係を変革していく上でも人間自身がどのように準備されるかによって不利な客観的情勢を有利に転換させることもでき、

有利な情勢を十分利用できない場合もありうる。
　人間は不利な自然の条件や社会的影響を乗り越え、有利な環境は積極的に利用しながら自然と社会を改造していく。
　このように人間は自然と社会を改造する上で物質的・技術的手段をはじめとする何らかの客観的要因よりも最も決定的な要因となるのである。
　人間が自然と社会の改造、発展において決定的役割を果たすということはすなわち、自己の運命を切り開く上で決定的役割を果たすことを意味する。
　ご存知のように人間の運命は世界を改造する過程を通じて開拓される。ところが、世界の改造、発展において人間が決定的役割を果たすため、人間の運命を切り開く上でもそれに代わるいかなる力もない。
　人間の運命を切り開く力はほかならぬ人間自身にある。人間はもっぱら自分の力でのみ自己の運命を開拓することができ、そのような力を持っている。
　今まで運命の主人は人間自身であり、運命を開拓する力も自分自身にあるということについて解説した。
　この原理がほかならぬ運命開拓の根本的原理であり、ここにチュチェ思想の真髄がある。チュチェ思想の他の全ての内容はこの原理に基づいており、それを具現して具体的に展開されている。
　従ってチュチェ思想を一言で言って、自己の運命の主人は自分自身であり、自己の運命を切り開く力も自分自身にあるという原理で表現したりもした。
　ではどういうわけで、人間が自然と社会、自分の運命の主人になり、自然と社会を改造し、自己の運命を自分の力で開拓していく存在になるのかを続けて見ることにしよう。

3．人間はどういう存在なのか

　世界観の見地から見る人間はどういう存在なのかという問題は、他の物質的存在にはなく、もっぱら人間にのみ固有な属性を解明する問題である。
　人間がどういう存在であるかという問題は、世界観の研究において長い歴史的期間にわたって論議されてきた。その過程であれこれの見解がたくさん生まれたが、どの見解も人間について哲学的に正しく解明してはいなかった。
　人間に対する完璧な科学的解明はやがてチュチェ思想によって与えられるようになった。

1）運命の「門」を開く「鍵」

　古代ギリシアの有名な哲学者ソクラテスは「汝自らを知れ」という標語をよく使ったという。
　この標語はそもそも彼と縁の深いデルフォイ神域の大門に掛かっていた。
　「汝自らを知れ」
　この標語をよく言っていたソクラテス自身も、人間とはどういう存在であるのかについて正しい解答を持っていなかった。
　では古代の人々は、人間に対するどういう見解を持って神域の大門を通ったのであろうか。
　デルフォイ神域の大門に掛かっていたこの言葉が、今日にも私たちに意味深長に聞こえるのはなぜなのか。
　人間に対する世界観的な理解は、たとえて言えば運命の「門」を開く「鍵」であると言える。
　各人は人間の本性に対する見解に基づいて自分の生の目的と方向を

決定し、その実現を目指す方途も探すようになる。
生を営むということは、人間が自己の本性的要求（本性とは人間自身の特性、性質を指し、本性的な要求といえば、物質的な要求だけでなく、精神文化的な要求、社会的・政治的側面での要求などをも言う）を実現していくという意味である。そのため誰もが人間の本性に対するさまざまな見解を持ち、そこから出発して人生の道を選択するのである。
実際に、人類の歴史は、多くの「鍵」が出現し、それによる相異なる運命の「門」が開かれてきた過程であったといっても過言ではない。
では人間の運命の開拓史上にはどういう「鍵」が出現し、それによって開かれた「門」の後ろではどういう運命が待っていたかを見ることにしよう。
ここで数千年にわたる世界観の発展史を一々列挙することはできない。またそうする必要もない。ただ人間に対する見解をいくつかの種類にまとめて簡単に見ることにしよう。
過去には主に人間を精神的な存在と見なす見解と、物質的存在、すなわち、自然的、生物学的存在と見なす見解が支配した。
人間を精神的な存在に見なした代表的な例がヘーゲルの見解である。
チューリンゲン大学の時代に「老人」というあだ名で呼ばれるほど動作の遅かった若者として卒業の時には「神学はできるが、哲学的才能はなし」という評定も受けたが、後世にドイツ・ブルジョア哲学界を支配したヘーゲル（1770～1831）、そのヘーゲルは世界を「絶対理念」、「世界精神」の自己展開の過程に見たのである。そうしながら人間を「絶対理念」、「世界精神」の一定の発展段階における、精神的発現であると見なした。彼は「人間の本質は思惟」だと言った。
人間を精神的な存在と見なす見解にはこの他にも人間の本性を「生存意志」、「権力意志」と見なした見解もあり、「信仰心」を本性と見なした見解もある。
人間を自然的、生物学的存在と見なす見解としてはフロイトの見解を挙げることができる。

フロイト（1856～1939）によれば、意識は「潜在意識」に服従し、この「潜在意識」は内容上「リビドー（性欲）」である。
意識は「リビドー」と社会的環境間の葛藤によって発生する。この葛藤は幼年の初期に始まり、その葛藤がどのようになされるかによって人間の運命も宿命的に決定される。
フロイト主義心理学は荒唐無稽にも、人間の心理を含めた全ての精神活動だけでなく、階級闘争、革命など、古い社会を改造するための人民大衆の闘争までも「リビドー」のそれぞれの発現に、それを抑制した結果生じた非正常な現象に説明する。
人間を精神的な存在と見なしたり、自然的、生物学的存在と見なしたりする、こうした見解は、階級的利害関係を反映した社会的・政治的性格を帯びており、歴史的に深刻な論争が行なわれてきた。
たとえば人間を本能によって支配される存在と見なす見解が、弱肉強食のルールが支配する資本主義社会の弁護に利用され、勤労大衆の間に腐敗と堕落を助長させたということを見極めるには難しくない。
人間は純粋な精神的存在でも、単なる生物学的存在でもない。
人間は社会的存在である。ここに他の生物学的存在と区別される人間の重要な特性がある。
マルクス主義は人間の本質を社会関係の総体として規定した。マルクスは1845年に発表した「フォイエルバッハに関するテーゼ」において「人間の本質は……社会的諸関係の総体である」と書いている。
これは人間が社会的関係の中で生活するということであり、人間の属性が社会的関係によって規定されるということである。
ところがこの見解は、人間そのものが持っている本質的特性に対する解明とはならない。
一方、従来にも人間そのものが持っている特性を持って人間の本質を解明しようという試みがあった。
人間を話す存在、労働する存在、思惟する存在という風に規定したのがその実例である。もちろんこれらは人間に特有なものである。
しかし、これらは皆人間の本質的属性の発現である、活動の個別的

側面を持って論じたものである。従ってそれらの見解は、人間の本質的特性を科学的に、全面的に解明したものにはなれない。

このように従来の思想は、人間の運命についてあれこれと多く論議はしながらも人間の本質的特性を正しく解明してはいなかった。人間とはどういう存在であるのかを正しく理解しなかったことから、従来の思想は、人々に運命の道を正しく指し示すことができなかったのである。

結局チュチェ思想によって人間が自主性と創造性、意識性を持つ社会的存在であることが科学的に解明されるようになった。

こうして人間に真の運命開拓の正しい道を指し示しうる、鍵が与えられるようになった。

では今から人間に対するチュチェ思想の見解を具体的に見ることにしよう。

2）起点

チュチェ思想は、人間に対する哲学的考察においてあくまでも人間が社会的存在であるということから出発する。

私たちは服を着るとき、始めのボタンを掛け間違えば最後まで間違って掛けるようなケースに度々ぶつかる。

これと同じく、人間の本質的特性を論ずるにあたっても、その出発をどこからするかが重要である。

すなわち人間を自然的、生物学的存在に見なす観点から出発して、それ自体の特性を明らかにするか、でなければ社会的存在であることから出発するかに問題解決の成果いかんがかかっている。

仮に人間を単に自然的、生物学的存在とだけ見なす観点に基づいて人間の本性を解明するとしよう。

そうすれば人間の本性を生命物質一般が持っている本能的属性の発展・完成と見るようになるが、これは、人間を生命物質一般、特に動物と同じく理解するということを意味する。

結局、社会的存在である人間と生命物質間の根本的な境が曖昧に

なり、こういうところから人種論のような間違った見解に陥るようになる。

人種論は民族文化と民族の精神能力、民族性が人種的素質によって規定され、社会的不平等も人種的遺伝の差に基づくと主張する反動的な理論である。

人種論を理論的に体系づけたフランスの外交官であるゴビノー（1816～1882）は、白人は「高等人種」に、有色人は「劣等人種」に規定し、当然白人種が有色人種を支配すべきであると説教した。

この理論がその後ヒトラー・ファシズムによって利用され、今日も人種差別政策の実施に奉仕しているのは何を物語っているのか。

もちろん人間は他の自然的、生物学的存在と同じ点も持っている。

たとえば、他の全ての事物がそうであるように人間も物質からなっている。人間の肉体は水分、蛋白質、脂肪、炭水化物、無機塩類、もっと具体的には酸素、炭素、水素、窒素をはじめ、各種の元素からなっているが、これらは他の事物にもある。

生命体の見地からしても人間は他の生命体と同じ点を持っていると同時に異なる点を持っている。同じ点は、たとえば、人間も他の生命体のように物質代謝を行うということである。異なる点は、人間は動物には比べようもなく発達した脳髄を持っているとか、直立歩行し、精巧に動く手を持っているとか、などである。

ところが、生物学的見地でのこのような差をもってしては、なぜ人間だけが世界を支配し改造するのかを知ることができない。

生物学的差は動物同士にも持っている。もし生物学的特性の側面だけなら、程度の差こそあれ、動物もその発展程度に即応した一定の水準で世界を支配し改造することができたであろう。

しかし、知られているようにいくら発達した動物も、極めて低い水準でさえ世界を支配し改造することはできない。

人間がサルや類人猿ではない人間となり、人類が地球上に出現するようになったのは何のためか、ほかならぬ人間が社会を成して生きたからである。

それゆえいかなる物質的存在にもない、人間だけが持つ特殊な属性は当然、社会的存在の面から探すべきである。

チュチェ思想は人間が社会的存在であることを明らかにし、そこから出発して人間の本質的特性を解明する方向へと進んだのである。

金正日国防委員長は次のように述べている。

「……人間に対する哲学的考察においては、あくまでも人間が社会的存在であるという点から出発しなければなりません」

人間は社会的存在である。

人間が社会的存在であるということは、人間が社会的関係を結んで社会的集団を成して生き活動する存在だということである。社会的関係を結んで生き活動するというところに他の全ての自然的存在、生物学的存在と根本的に区別される人間の重要な特性がある。

もちろん人間は高度に発達した有機体を持っているが、それがいくら発達していても人間が社会的集団を成し社会的関係を結んで生き活動しなかったならば、今日のような存在になり得なかったであろう。

人間は社会的関係の中でのみ生存し発展しうる存在である。

具体的に見よう。

人間が生きていくためにはまず、食べ物、着るものなど、消費生活に必要な物質的手段が必要であるが、それらは社会的労働を通じてのみ得ることができる。なぜなら物質的富の創造に必要な全てのもの、すなわち知識、技術、経験、労働道具などは皆社会的所産であるからである。

人間の全ての資質と能力も社会的教育と実践、言い換えれば社会的関係の中でのみ形成され発展する。

人間が社会的にのみ存在し発展しうるということは、社会的関係の改造が、個人の意思や力では成し得ず、社会的力によってのみ可能であるという事実から見ても明白になる。

世界で社会的存在はただ人間だけである。

チュチェ思想は自然的存在と区別して、社会的存在という概念を使っている。すなわち社会的富と社会的関係は、社会的存在に含まれないのである。この場合、世界で社会的存在は人間だけである。ほかならぬ、社会的関係を結んで生きる人間をさして社会的存在であるという。

まさに社会的存在だからこそ、人間は自主性と創造性、意識性という本質的特性を持つようになったのである。

今からそれについて一つ一つ見ることにしよう。

3）自由か従属か

「私の苦しみを屈従と換えないことを信じたまえ！」

これは古代ギリシアの作家アイスキュロス（B.C.525～B.C.456）が書いた悲劇作品の主人公プロメテウスが言った言葉である。

雷の神ゼウスの命令を受けたプロメテウス（古代ギリシア神話で人間に火を与えた人間の「守護神」）とエピメテウス兄弟が地上に生物体を作ったとき、人間は何も着ていない素肌であったため寒さに震えていた。弟との議論の挙句人間に火を与えることにしたプロメテウスはゼウスのところに訪ねていって、人間に火を与えるようにしてくれと請願したが、ゼウスは拒絶した。プロメテウスは人間を同情しながらゼウスのことを悪く思い、天上の神たちだけが使うようになっていた火を盗み出して人間に与えた。このときから人類には文明生活への道が開かれるようになった。

これを知って怒ったゼウスはプロメテウスを世界の端にある最も高い岩山の頂上に縛り付け、数え切れない苦しみを与えた。しかし、自分の行動が正しかったと考えたプロメテウスは人間の圧迫者であり、人類の全ての不幸の種であるゼウスを憎しみながら、いかなるひどい懲罰にもめげず、最後までゼウスと対抗して闘う。

古代ギリシアの人々が神話を作り出してから数千年が経った今日にも、人々がプロメテウスに対する話に愛着を持つのはなぜなのか。

プロメテウスが人間に火を与えたからであろうか。

火の発見が人類の文明発展において大きな意義を持ったことは周知

のことであるが、それは人間自身が発見して利用したのであって決して神話中のプロメテウスが与えたのではない。
　するとなぜなのか。
　神々が訪ねてきて同情しながら、恐ろしい雷の神ゼウスの意思を逆らわずに頭を下げるようにと忠告したとき、彼はどのように叫んだのか。
　「雷の神ゼウスよ、あなたがいくら私を苦しめてもお前が没落する日は必ず来るであろう。おお、お前は死んで一握りの灰になった後に、権力と従属の間にどんな差があるのかを知るようになるであろう」
　自由か、従属か、二つの選択肢のうちプロメテウスは断固と自由の道を選んだのである。
　これである。
　人々はプロメテウスの形象で圧制に反対し、あらゆる辛苦に耐えながら自分の前途を切り開いていく不屈の志向と闘争精神を見て称えるのである。
　人間は一定の自然的及び社会的環境の中で生きていく。自然的及び社会的環境は人間生活の必須の条件である。
　しかし一定の歴史的時期に生きる人々は、当該社会の発展水準による、自然的及び社会的従属と束縛を受けるようになる。
　たとえば、人間は生きていく過程で日照りと洪水、台風と地震のような生命と生活に対する威嚇と破壊、生活資料の不足、辛い労働など、自然の束縛を受けるようになる。だけでなく搾取社会で人間は階級的搾取と抑圧、民族的支配と従属を受けたりもする。
　自然と社会のこうした束縛と従属は、人間の生存と発展に不利に作用する。
　人間はこうした外部世界のあらゆる束縛と従属をそのまま甘受し、それに順応するのではなく、憎悪し排撃する。
　他の生命物質、たとえば動物は外部世界と自らを自覚できず、外部世界に自分を対立させることができない。従ってそれらは周囲世界に全的に従属している。

　しかし人間は自然の束縛から脱し、自由に生きるために、不利な自然地理的条件と環境を有利なものに作り変える活動を行う。
　また、社会的従属と束縛から脱して自由に生きるために、民族的及び階級的支配と従属、古い思想と技術、文化に反対する闘争を繰り広げる。
　これは周囲世界に従属するのではなく、自然と社会のあらゆる束縛と従属に反対し自由に生きようとするのが人間の固有の特性であることを見せている。
　チュチェ思想は人間のこうした特性を自主性と定義する。
　金正日国防委員長は次のように述べている。
　「自主性は、世界と自己の運命の主人として自主的に生き発展しようとする社会的人間の属性です」
　人間は、自主性を持つ存在、他の全ての自然的存在と区別される自主的な社会的存在である。人間は自主性を持っているがゆえに、自然と社会のあらゆる束縛と従属に反対して全てを自分に奉仕するように変えていく。
　人間は自然を自分に奉仕させることにより、生活手段をたくさん作り出し、生活水準を高めていく。また、自分の力に代わったり、それを増大しうる労働手段を創造し、より発展させることにより、困難で骨の折れる労働から脱し、労働を楽しいものに変えていく。
　人間は社会も改造して、それが集団生活、共同生活によりよく奉仕するように作り変える。
　ある階級や民族による他の階級と民族への政治的抑圧と経済的搾取に反対し、社会の構成員たちの完全な社会的平等を保障する社会的関係を樹立し発展させ、新しい社会的関係が人間によりよく奉仕するように改変していく。
　このようにあらゆる束縛と従属に反対するだけでなく、自然と社会を自分に奉仕するよう改造していこうというのが、自然的存在と区別される人間の固有の特性なのである。
　自主性は社会的存在である人間にとって第一の生命であると言える

ほど、人間という存在を規定する上で最も重要な属性となる。

人間にとって自主性が生命であるというとき、それは社会的・政治的生命を指す。

人間は肉体的生命と共に社会的・政治的生命を持っている。肉体的生命が生命有機体としての人間の生命なら、社会的・政治的生命は、社会的存在としての人間の生命である。

人間の社会的・政治的生命は自主性を持ってこそ維持される。人間が自主性を失って他人に従属していれば、命はあっても社会的人間としては屍と変わりがない。こういうことから自主性を社会的存在である人間の生命であるというのである。

自主性という概念は一般的に、人間の根本的特性を規定する概念としてだけでなく、国と民族の生命を表す社会的・政治的概念としても使われる。

自主性が人間にとって生命であるのと同様に、国と民族にとっても生命である。これは自主性が国と民族を独自の社会的集団に存立させる根本的属性であり、国と民族の強固・発展を保障する源であることを意味する。

人間が自主性を持っているということは、自主的要求を持って自主的な活動をするところで現れる。

自主的要求とは、いかなる支配や従属も受けずに世界と自分の運命の主人として生き発展しようとする要求を言う。

すなわち、自然の束縛から脱して豊かな物質生活を享受しながら生きようという要求、社会的従属から脱して社会の平等な構成員として助け合いながら睦まじく生き発展しようという要求、そしてあらゆる誤った思想、無知と蒙昧から脱して高尚で文化的で美しい思想・文化生活を営もうという要求を指す。

自主的な要求は、集団の自主的要求と個人の自主的要求として提起される。それは人間が社会的、集団的存在であるからである。

集団の自主的要求は、社会的集団の生存と発展のための各構成員の共通した要求である。

人間は社会的集団を成して生き活動する。人間は集団を成してこそ、社会的人間になりうる。集団が存在してこそ、個人も存在することができ、集団が発展してこそ、個人の運命も切り開かれる。こういうところから集団の各構成員は、社会的集団がもっと長く維持され、発展していくことを求める。

このように社会的集団の生存と発展のために集団の各構成員たちが持つ共通の要求を集団の自主的要求という。

個人の自主的要求は、社会的集団の平等な構成員として持つ要求であり、社会的集団に寄与することにより当然保障される要求である。

個人の自主的要求は、個人主義的貪欲と根本的に区別される。個人の自主的要求は、社会的集団の利益を上位に置いて集団の利益と個人の利益を一致させ、集団の利益の中で個人の利益を実現していこうという要求である。しかし個人主義的貪欲は、集団を無視して集団の利益と個人の利益を対立させ、集団の利益の上に個人の利益を置き、全てを個人の利益に服従させようという、誤った要求である。それゆえ個人主義的貪欲は個人の自主的要求と根本的に異なり、人間の本性的要求と何の縁もないのである。

集団の自主的要求と個人の自主的要求は集団主義を通じてのみより立派に実現される。それは集団主義の基本的要求が集団の要求と利益を優先視しながら各個人に十分な配慮を施すことだからである。集団主義だけが集団の団結と協力を強化し、集団の全構成員の創意を高め、集団の自主的要求と個人の自主的要求を正しく結合させて共に円滑に実現していくようにする。

このように自主的要求を持ってあらゆる従属と束縛に反対し、世界と自分の運命の主人になるために闘う人間がほかならぬ自主性を持つ社会的存在なのである。

結局人間の生とは本質において、自主性を実現するための過程であると言える。

自主性を正しく理解する上で重要なのはまた、それを一部のブル

ジョア哲学、特に実存主義系列の哲学が押し立てる、個人の「自立性」や「意志の自由」と同じく理解してはならないということである。

一連の実存主義哲学で主張している個人の「自立性」、「意志の自由」というのは、社会的環境のあらゆる影響を拒否して全く恣意的に、勝手気ままに決心して活動するブルジョア的放縦に過ぎない。

社会と切り離れた孤立的な個人、何の社会的影響も受けない個人の「自立性」や「意志の自由」は、観念の中で幻想としてのみ存在することができる。

資本主義社会で資本の支配から脱して資本主義的社会関係の影響を受けない人間は現実的にいない。

資本主義社会で社会的影響を受けない個人の「自立性」や「意志の自由」を論ずることは、個人利己主義と自由主義を合理化し、資本主義制度を擁護するための詭弁に過ぎない。

自主性と自由の相互関係もよく理解しなければならない。

自主性は自由を一つの契機として内包する人間の性質である。

そもそも自主という言葉は文字通りに自らが主人になるという意味である。

人間がある対象に対して主人になるということは、いかなる束縛も受けずにそれを自分の要求に服従させ、自分の利益に即して処理するようになることを意味する。

自由とは一般的にいかなる従属や束縛からも解放された状態を意味する概念である。

自主性の発現としての自主的な生活がいかなる従属や束縛も許さない生活であるという点で、自由と共通性を持つ。

しかし自主性は自由と区別される特性も持つ。

自主性が人間の本質的特性であるなら、自由は人間が生きていく状態を表す言葉である。人間が自由に生きようという特性を指して自主性と呼ぶのである。

4）科学技術を通してみる人間の姿

今は科学と技術の時代である。18世紀に第1次技術革命が発生して以来、人類は第2次、第3次の技術革命を経てきたが、今日のように科学技術が爆発的に発展したときはかつてなかった。

科学技術の驚異的な発展により経済が飛躍的に発展し、人間の生活面貌で大きな変化が起こっている。

誰の口にも「知識経済」「AI」という単語が上げられるほど、科学技術が社会政治、経済発展と各個人の生活の隅々に及ぼす影響力は極めて大きい。

人間が想像の中でのみ描いていた多くのことが現実となり、人類はより速いテンポで未来に向けて前進するようになった。

では科学技術の発展が人間の存在を把握することと何の連関があるのか。

辞典には科学と技術についてこう定義している。

「科学は事象の本質とその変化発展の合法則性に関する知識の体系である。技術は科学の法則を利用して事象を改造するための方法に関する知識と技能、労働手段であるという意味で差がある」

人間は科学技術を利用して周囲世界の事象の中で古いものを改造して新しいものを作り出す。

チュチェ思想は、周囲世界の事象を改造し新しいものを作り出す人間の特性を創造性と定義付けた。

金正日国防委員長は次のように述べている。

「創造性は、目的意識的に世界を改造し自己の運命を開いていく社会的人間の属性です」

人間は世界で唯一に創造性を持つ存在、創造的な社会的な存在である。

創造性は自主性と共に人間の本質的特性の一つを成す。すなわち自主性のように人間にのみ固有にあって、他の生命物質には全くない特性である。

人間は、創造性を持っていることからして活動方法が歳月の流れと共により発展する。

農業を見てもそうである。

人類史の初期、主に植物の採集や狩りで生きていた人間は、それでは到底食べる問題を解決することができなくなるや農事をし始めた。1万年前の古代人が農作物を栽培し始めたという資料もある。

そのときから今日に至る期間、その方法は不断に変わり、今は伝統的な農事の方法とは根本的に異なる、無土壌栽培方法まで生まれている。このように人間のみが弛みなく古いものを新しいものに変えていく。

人間は単に古いものを新しいものに直していくだけでなく、いまだなかった、全く新しいものを作り出す。

ナノ科学技術の発展と利用がそうであり、人類史上初めて打ち立てられた社会、人間の自主的本性にかなった社会主義社会の出現がまさにそうである。

ではどういうわけで人間だけが創造性を持つ存在となるのか。

それは人間だけが創造的能力を持っているからである。

創造的能力とは人間が社会的実践過程で得た科学技術知識と経験、技能などである。言い換えれば、人間が古いものを変革し新しいものを作り出しながら自然と社会をより自分自身に便利で有益なものに改変していく力が創造的能力なのである。

人間は創造的能力を持っていることからして、周囲世界の事物を自分の生活上の要求にふさわしく変化させたり、新しいものを作り出したりすることができる。

人間の創造的能力のうち基本が科学技術である。

現在、科学技術の飛躍的な発展は、人間こそ世界で最も力強い存在であることをはっきりと示す一つの縮図となっている。

誰かがこのような質問を提起したことがある。チュチェ思想は人間が世界で最も力強い存在であると主張しているが、それが現実的に証明されるにはいまだ長い時間が必要ではないのか、世界には死滅していく生命体が少なくないが、いつかは人間もあのようになるのではないか、現在、人間が征服した周囲世界の領域とは取るに足りないし、宇宙は無限かつ広大であるのに。……

もちろんすでに久しい以前からあった多くの生命体が死滅し、今日もなくなっている生命体が一つや二つでない。動物は創造的能力を持っておらず、創造することができないため自然環境の影響を克服できない。

しかし、人間は加速的に無限に発展する創造的能力を持っていることからして、世界に出現して以来滅亡も、衰退もしないで引き続き発展してきたし、今後も永遠に発展するであろう。

21世紀の初めに遠距離通信及び電子工学分野の技術を開拓しているイギリスのブリティシュ・テレコミュニケーション会社ロンドン支社の学者たちは、現世紀に達成される新しい科学的発明と研究成果を次のように予言した。

—2020年にホログラム技術を利用した立体映像テレビが出現する。

—2025年に人間の頭脳がコンピュータに接続され、「電子社会」が成される。

—2030年に人間の模様をし、アインシュタインの知能水準の頭脳を持つロボットが出現する。

—2032年に米国会図書館にある全ての文献資料が角砂糖サイズの電子装置に全て入力される。

—2035年にナノ技術を導入した練り歯磨きが作られ、練り歯磨きの中の分子サイズほどの極小型ロボットが歯にできた歯石とカリエスを除去するようになる。

—2040年に熱核融合技術がエネルギー生産に導入されて電気の値段が安くなる。

—2075年になれば人間が現在から未来へ、未来から現在へと移動しうるようになるなど、時間上の「障壁」をなくす方法が開発される。

—2100年になれば、人間が死んだ後にも彼の個性をソフト化して保存しうる技術が開発され、電子世界で永久に再生できるようになる。

今、この予言のうち、あるものは現実となり、繰り上げて実現したものもあり、また予言にはなかった科学成果も達成された。

現代科学技術の目覚しい発展と共に人間は、創造的存在としてのその姿をより誇示しながら、未来に向かって前進するであろう。

5）意識的な社会的存在

人間は自主性、創造性と共に意識性を持っている。

金正日国防委員長は次のように述べている。

「意識性は、世界と自分自身を把握して改造する全ての活動を規制する社会的人間の属性です」

人間は自主的で創造的な社会的存在であると同時に、意識的な社会的存在である。

人間は周囲世界と自分自身を把握し、またそれを改造するために不断に活動するが、人間の活動のそれぞれの瞬間や契機ごとに貫かれているのが意識性である。先に人間が自主性と創造性を持っていることについて解説したが、この意識性によって社会的存在である人間の自主性、創造性が裏打ちされ、その合目的的な認識活動、実践活動が保障される。

具体的に見ることにしよう。

人間は何よりも意識性からして周囲世界と自分自身を把握する。

たとえば、鉱石で鉄を生産するためには、鉱石がどのぐらいの温度で溶かれるか、鉱石から鉄成分をどのように分け、それを使う用途によってどのようにすべきかを研究しなければならない。

人間はまた、意識性からして自分の活動を構想する。

人間は誰もが自分の要求と利害関係を自覚し、それに基づいて行動の目的を明白に立て、次には自分の目的を実現するための手段と方法を選択する。人間がある事物に向き合うとき、常に生活に有益なのか否か、どうすればそれを有益に使えるようにすべきかを考えるのは、意識性を持っているとの証拠である。

人間はまた意識性からして、変化される現実の条件に合わせて自分の活動を調節し、立ちはだかる隘路や難関を乗り越えていくよう自分を統制する。

もちろん人間の活動にも生物学的側面から出発したものがある。仮に食べるとか、寝るとか、ということは生物学的、本能的な要求を実現するための行動である。しかし、人間は意識性を持っているがゆえに、自分の目的を達成するためにひもじいこともこらえ、ひどい眠気にも耐えることができる。そして前進途上に難関が横たわるとその克服方途を探し出し、勇敢さを発揮したりするのである。

結局、人間は意識性からして自分の自主的要求を悟り、それに即応して創造的活動を目的意識的に行うのである。

それゆえ高い意識性を発揮するとき、われわれの全ての活動がより成功裏に行われるのである。

意識性は、自主性、創造性と同じく、人間にのみ固有なものである。

もっぱら人間だけが自分の全ての行動を調節、統制することができる。

人間が自分の全ての行動を調節、統制しうるのは、意識を持っていることと関連する。

意識は人間の肉体的器官の中でも最も発達した脳髄の高級な機能である。人間の脳髄は生命活動で中枢の役割を果たし、脳髄の機能である意識は、人間の全ての活動を指揮する。

意識は内容的に見れば思想・意識と知識からなっている。ここでも思想・意識は人間の要求と利害関係を反映していることからして人間の活動を直接規制して調節、統制する。

このように意識を持って自分の全ての活動を調節、統制する人間の性質がほかならぬ意識性である。

意識性を理解するに当たって、それが自主性、創造性と共に社会歴史的に形成され、発展する属性であることを強調する必要がある。

思想・意識と知識を持って、自分の行動を自主的に創造的に行っていく人間の属性は決して遺伝的に先代から譲られたものではない。これについては人間が教育と社会的実践過程を通じてのみさまざまな思想と科学技術知識を習得することができるということを考えてみれば、明白に理解できるのである。

すでに研究されているように、人間の肉体的器官そのものは、社会的協力の過程で今日のように完成された。人間の脳髄は、社会的労働の過程で初めてその発達が可能となった。
すなわち意識性は社会・歴史的に形成され発展したもの、社会が与えた属性である。
同じく自主性、創造性も社会歴史的にのみ形成され発展する社会的属性であることを忘れてはならない。
今まで論議されたことを一つにまとめてみよう。
自主性と創造性、意識性は社会的存在である人間だけが持っている、特殊な属性である。世界に自主性と創造性、意識性を持った存在は人間だけであるが、その理由は明白である。社会を成して生きる存在が人間しかいないからである。
まさに自主性、創造性、意識性を持つ社会的存在であるがゆえに人間は、世界を支配し改造、発展させていくのである。
ひいては自己の運命の主人、自己の運命を自分の手で開拓していく力強い存在となるのである。

4. 人間を中心に見て対応する世界

先に私たちは、人間が自主性と創造性、意識性を持つ社会的存在であるということについて解説した。
今からは世界に対する見解、観点と立場について見ることにする。
世界に対する見解とは全体としての世界がどのようになっており、どのように変化、発展するのかという問題に対する解答であり、観点と立場とは、世界を対象として活動する上でどういう態度をとるべきかという問題に対する解答である。
チュチェ思想は人間を世界の主人の地位に据えて世界に対する見解、観点と立場を明らかにする。
それは大きく二つの部分に分けて見ることができる。一つは世界に対する人間中心の見解であり、もう一つは人間を中心に据えて世界に対応する観点と立場である。
一つ一つ見ることにしよう。

1）世界は人間によって支配され改造される

人間は世界の中で生きている。これは人間がいつも自然と社会の何かを見て一定の見解を持ち、一定の態度を表するということを意味する。ところが個別の事象に関する人間の見解と態度は、いつも全体としての世界に対する最も一般的な見解と観点を前提とする。（これについては第1章第1節の「人生の灯台」を参考）
従って人間が何事でも正しく見て対処していくためにはまず、周囲世界に対する世界観的な見解と観点から正しく打ち立てなければならないのである。
チュチェ思想は人間の本質的特性を解明し、それに基づいて世界に対する見解を明らかにしている。

金正日国防委員長は次のように述べている。
「世界が人間によって支配され改造されるというのは、人間との関係において明らかにした世界に対する新たな見解です」
読者たちはもしかしてこういうことを考えたことがあるだろうか。
この世に支配と改造という言葉がいつ生まれたかということを。一見すれば人々は日常の生活ではあまり使わない単語なので興味がないかも知れないが、この二つの単語は重要な意味を持っている。それは人間自身の生活と直接的に連関している。
支配と改造という表現がいつ生まれたかは、はっきりと言えない。しかし人間がこの世に生まれてから使われるようになったということは明白なのである。
地球上に人間が生まれる前の世界なら自然だけを意味する。自然の中では発展段階も異なり、構造と機能の面でも区別される千差万別の事象が相互作用しながら多様な関係を結んでいる。しかし、その関係をよく見ると、それが自然発生的なものであり、盲目的に作用するということが分かる。ここではあるものがほかのものに服従するとか、あるものを目的意識的に改造していくとかということなど全くない。
しかし、人間が出現しながら事情は変わった。人間は周囲世界と自然発生的で盲目的な関係ではなく、主動的で目的意識的な関係を結んでいる。こうした関係を反映している概念がまさに支配と改造である。
すなわち今日の世界は人間によって支配され改造される。言い換えれば、自然と社会は人間の自主的で創造的な活動によって人間のための世界に変わっていく。
まず自然から見よう。
人間は自然の中で生き、自然の多様な事象と密接な連関を持っている。人間は自然を離れて一刻も生きていけず、自然環境の影響を受けている。
しかし、人間は自然の従属物ではない。人間は周囲世界の多様な事象を統制し、利用しながら生きていく。自主的で創造的な活動を

通じて自然を支配し改造していく。
人間の活動によって雷、台風をはじめ人間の生存と発展に大きな被害を与えていた事象と盲目的な力の破壊的な作用が抑制され、克服されていく。また人間によって野生の動植物が家畜や農作物になり、鉱物が採掘、利用されるなど、人間に奉仕していなかった自然の事象が人間の生産手段と生活資材として利用されていく。
自然だけでなく社会も人間によって支配され改造される。
それは人間の自主性を蹂躙する社会関係が人民大衆の積極的な闘争によって、人間の自主性を保障する社会関係に転換され、人間のために奉仕するところで現れる。
人間は社会関係を離れては生存することも発展することもできない。社会関係の形成と発展は人々の主観的意思とは関係なく、客観的法則によって成される。従って人々がその法則を認識し支配できない間は、社会が人間の自主性の実現をあれこれと阻害するようになる。
人間の自主的な思想意識と創造的能力が発展するに即して社会的関係は絶えず改善されてきた。
奴隷社会から封建社会へ、封建社会から資本主義社会へ、資本主義社会から社会主義への移行がこれを見せている。特に、社会主義制度が樹立されることにより、人々は社会生活の全ての分野を自分の意思と要求に即して管理し、主動的に発展させていくようになった。
世界が人間によって支配され改造されるのは言うまでもなく、人間が自主性、創造性、意識性を持つ社会的存在であるからである。
自らの合法則性によって盲目的に運動、変化、発展していた世界は、人間が出現したことにより、人間によって支配、改造され、発展する世界へとその面貌を変えるようになった。
これと関連して世界そのものが物質から成り立っており、自らの固有の法則によって運動し変化、発展するということも無視してはならない。
もし世界が偶然的に、勝手気ままに運動するとするなら、人間は決して世界を認識することもできず、従って人間がそれを支配し改造

することもできないであろう。世界は偶然的に、無秩序的にではなく、固有の法則によって変化、発展する。それゆえ人間は客観的法則を認識してそれを調節、統制し改造することができるのである。

世界が人間によって支配され改造されるという見解を持つ上で以下の点に注意しなければならない。

世界が人間によって支配されるということは、世界が人間を中心にして成されたという意味ではない。世界は人間が生まれるずっと以前から存在してきた。世界は決して人間を中心にして創造されたのではない。

一方、世界が人間によって改造されるということは、世界の全ての変化が人間によって成されるという意味ではない。

自然は人間が出現する前から自分の法則によって自ら変化、発展してきたし、その過程は今日も変わりがない。社会関係は人々の主観的欲望によって勝手に作られたものでもなく、何らかの約束の下に成されたものでもない。ただ人間はこの運動法則を知って、それを利用することによって世界を改造し発展させていくのである。

今この時刻にも人々は絶えず周囲世界を自分の要求に即して変えたり、何かを新たに作り出している。新しい都市が建設され、新しい油田が開発され、山や川の姿が日に日に変わっている。新しい法が作られ、社会関係が改善されていく。

世界は時々刻々、人間によってより支配され、改造されている。

2）人間中心の価値観

私たちは普通、同じ知識でも使う人によって悪くも、有益にも利用されることを見ることができ、一つの社会現象を見ても人々がそれぞれ異なる態度をとるのを目撃することができる。

たとえば、原子力技術は人々の文明生活のためではなく、帝国主義者によって大量殺戮兵器の製作に先に盗用されたことにより広島と長崎に大惨事をもたらしたのである。

これは、現実の世界に対応する人々の観点と立場が異なっていた結果、招来されたことである。

人々の行動の方向と原則を決定するのは周囲世界に対応する、彼らの最も一般的な観点と立場である。

それゆえ人間が真の人生を切り開くためには、世界に対応する正しい観点と立場を持たなければならない。

ではどういう観点と立場を持たなければならないのか。

金正日国防委員長は次のように述べている。

「人間を中心に世界に対応するというのは、世界の主人である人間の利益に基づいて世界に対応することを意味します。

人間は世界の主人であるため、当然人間の利益の見地から世界に対応すべきです」

チュチェ思想が明らかにした世界に対する観点と立場は、世界の主人である人間を中心にして世界に対応する観点と立場である。

人間を中心に世界に対応するというのは、何よりも世界の主人である人間の利益から出発して世界に対応するということである。

これは容易く言えば、人間中心の価値観を持つということを意味する。事象の価値を評価したり、何のことかを展開する上で常に人間に利なのか、害なのかという見地で処理していくのが、ほかならぬ人間の利益から出発して世界に対応することである。

人間は世界の主人であるため、当然人間の利益の見地から世界に対応しなければならない。人間が世界を認識し、改造することは世界の全てを人間のために奉仕させるためである。世界で最も貴重なのは人間であり、世界には人間の利益よりもっと貴重なものはない。世界の全ての事物はもっぱら人間に奉仕する限りでのみ価値を持つのである。それゆえ人間によりよく奉仕するようにする見地から世界に対応することは、世界に対する最も正しい観点と立場となる。

人間の利益から出発して世界に対応するためにはどうすべきであるかをもっと具体的に見ることにしよう。

重要なのは、何よりも人間の利益を基準にして事象の価値を評価

することである。すなわち人間中心の価値観を持つことである。

価値評価は、人間の全ての行動に先立って必ず行われる必須の前提である。人間は当該の事象に対する価値を評価した後、そこから出発して行動するようになる。言い換えれば、その事象に対する自分の態度を決定して行動へと移る。

資本主義世界では全ての事物の価値だけでなく、人間の人格までもお金を基準に評価している。

それがどういう結果を生んだのか。

2025年3月6日付の朝鮮の『労働新聞』には次のような記事が掲載された。

「ある資本主義国でのこと。ある病院の門の前では病気にかかって苦しむ一人の労働者が診察さえ満足に受けられず、無念にも息絶え絶えになっていた。30回もこの病院、あの病院を転々したが、31回目の病院でも拒絶された彼は病院に足を踏み入れることができず、とうとう死んでしまった。……」

金銭中心の価値観は、人々を堕落させ、人間らしい道徳と情けを全く忘れさせたのである。

価値評価の基準はひとえに人間の利益でなければならない。

人間の利益から出発して世界に対応するためには、また、人間の活動の全過程を人間の自主的志向と要求の実現に服従させなければならない。

これは目的を立てて対象を決め、手段と方法を講じて結果を評価するなど、行動の全ての契機で徹底的に人間の利益を擁護するのが原則とならなければならないということを意味する。

たとえば、他人はどうであろうが、ただ自分だけよい暮らしをすることを生の目的とするならば、結果がどうなるであろうか。動物的な肉体的要求を満足させることだけであろう。

著名な学者であるキュリー夫婦を想起してみよう。彼らは自らの研究活動において個人的蓄財と享楽ではなく、人類の福祉増進に寄与することを目的とした。それゆえ苦心惨憺とした研究の末にプルトニウムとラジウムを発見し、その分離技術を研究してからもそれを利用してお金儲けをしようとしたのではなく、全人類のために研究成果を公開したのである。

国と民族の発展はあくまでも人間の利益を擁護する原則で成され、評価されなければならない。

ほかならぬこれが人間の利益から出発して世界に対応する観点と立場なのである。

3）幸せはおのずと来るのではない

人間は誰もが幸せであることを望む。活動で、生活で、自分の人生の理想が実現されることを願ってやまない。

しかし、幸せになろうという人々の態度と立場は、同じではない。私たちはたまたま、生活で幸運があることを願い、努力せずにただでいい結実を得ようという人々も目にするが、こうしては運命をまともに切り開いていけない。

幸せはおのずと来るのではない。偶然に期待をかけて座って待つような姿勢と立場では、幸せになることも、自己の運命を成功裏に切り開いていくこともできない。幸せをもたらし、運命を成功裏に開拓するためには、果たしてどういう姿勢と立場を持たなければならないのか。

チュチェ思想はこれにも正しい解答を与えている。

金正日国防委員長は次のように述べている。

「人間を中心に世界に対応するというのは、世界の改造者である人間の活動を基本にして世界の変化、発展に対応することを意味します」

人間の活動を基本にして世界の変化、発展に対応するというのは、世界を認識し改造する上で人間の主動的で積極的な活動を基本にして考察し、それに依拠することを意味する。

こう言えば、よく理解がいかないかも知れないが、もうちょっと具体的に見ることにしよう。

周囲世界の運動変化は、自己の法則に従っておのずと行われ、それには何の目的もない。世界の盲目的な運動変化は、人々に有利な生活環境を提供したり、不利な影響を及ぼしたりする。世界はおのずと人間に有利に変わるのではない。客観世界の変化、発展を座って待っていてはいつになっても人間の要求と利益が実現されない。人間は自己の活動でのみ物質世界の不利な影響を抑制し、有利な条件の作用には道を開いて、周囲世界を人間の志向と要求に即して改変するのである。

一方、世界の改造過程にはさまざまな物質的・技術的手段が参加し、社会の政治的、経済的、文化的条件が影響する。労働道具と機械設備、宣伝手段、暴力手段など、物質的・技術的手段とさまざまな社会的条件は、その役割もなかなか大きい。

しかし、物質的・技術的手段さえあれば、自然と社会がおのずと改変されるのではない。その威力がどのように発揮されるかも人間の役割にかかっている。また、社会的環境がよければ周囲世界の改造に有利であるのは事実であるが、いくらそれがよいとしても人間が積極的でないとそれも大きな効果を出せない。

人間の役割に全てがかかっている。従って客観的条件、物質的・技術的手段より人間自身の役割を重視し、その役割を高めて提起される問題を解決していかなければならない。

このように自らの積極的な努力で人生の理想と目的を実現しようという、主動的で積極的な立場を持ってこそ幸せをもたらすことができる。

結論的に言って、周囲世界の偶然的な影響や客観的条件に期待をかけるのではなく、主動的に、積極的に周囲世界を自分に有利に改変していこうという態度を持つこと、これが人間の活動の見地から世界の変化、発展に対応する観点と立場である。

では具体的にどうすべきか。

何よりも、人間自身を力強い存在に育成することを他の全ての工程に先立たせなければならない。

わが国の場合を見ることにしよう。

20世紀の40年代、日本帝国主義の植民地支配から解放された直後、

わが国には大学の卒業生が何人おらず、教育の実態が非常に立ち遅れていた。

金日成主席は解放直後に樹立された北朝鮮臨時人民委員会の初の会議の議定として鉛筆問題を提起して解決するようにし、建国初期、資金が最も不足していたにもかかわらず総合大学から建てるようにした。国の運命が定められる戦争時期に大学生たちを戦線から召還して学業を続けるようにする、歴史上類例を見ない措置も取ったのである。

その後にも金日成主席と金正日国防委員長は、終始一貫して教育活動を優先させ、それに大きな力を入れるようにした。

2012年、朝鮮では全般的12年制義務教育を実施するとの新しい法令が採択され、その実現を図る活動が本格的に推進されている。

これは人間をより有力な存在に育成することを全ての活動の第一工程にすべきとのチュチェ思想の要求が金正恩総書記により、国家活動で変わりなく立派に具現されていることを物語っている。

世界を認識し改造する担当者、決定的な要因である人間の全ての活動は、その準備程度によると言える。人間そのものが準備されずには何のこともうまくいかない。従って自主的な新しい社会建設で提起される全ての活動に先立って人間をより力強い存在に育成することを最初の工程に置かなければならない。

自主的な新しい社会建設で人間自身を有力な存在に育成することを全ての活動の第一工程に置くだけでなく、提起される問題を人々の創造的役割を高めて解決していくのが重要である。

全ての社会的運動がそうであるが、国と民族の運命を切り開く活動には二つの要因、主体的要因と客観的要因が作用する。つまりその国の人々自身の役割と経済的、地理的条件をはじめとする客観的要因の役割が作用する。

ここで何に依拠して提起される問題を解決していくべきなのか。

これに対する答えを、わが国の科学技術の発展成果に求めて見ることにしよう。物質的条件から見れば、わが国の科学者、技術者には全てが不足していて困難であった。しかし、彼らは祖国の富強・繁栄に

寄与しようという燃えるような愛国心を抱き、苦心奮闘して国の科学技術を最先端水準に引き上げた。

もちろん提起される問題を人間自身の役割を高めて解決していくことは、客観的、物質的条件をまったく無視するという意味ではない。

前述したように、物質的条件が大きな作用をし、その影響を無視することはできない。とりわけ物質的条件がよければこの上なく有利である。

しかし、全的にそれにすがり付いてはならない。人間自身の役割を高めなければ、いくら客観的条件が有利であっても意味がない。

人間の役割と客観的な物質的条件の影響、この二つのうち人間の役割を基本としなければならない。

こうするときにのみ、真の人生の道を切り開き、幸せを求めることができる。

本書を通じて読者たちは、チュチェ思想が持っている真理の力の源がどこにあり、朝鮮式の社会主義が根を下ろしている政治哲学の原理についてよく理解できたであろう。

このように本書は、科学的な世界観について、人間中心の哲学的原理、チュチェ思想の哲学的原理について簡単に解説した。

チュチェ思想の原理解説 1

チュチェ思想は世界をどのように見るのか

執　筆 ： 卓成一

翻　訳 ： 李鮮日

発行所 ： 朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社

発行日 ： 2026年4月

ㄱ−260880489333

E-mail: flph@star-co.net.kp

http://www.korean-books.com.kp

ISBN 978-9946-0-2822-4

朝鲜民主主義人民共和国
外国文出版社
2026